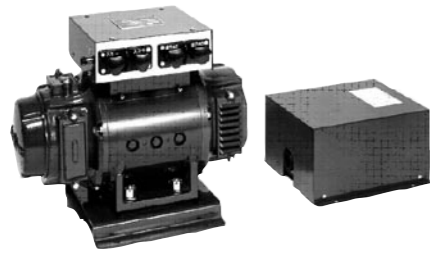


VOICE

ゴールドキング(株) 時代に則した車両用インバータ電源を開発

ゴールドキング(株)は、1950年にロータリーインバータの製作を開始し、その後約50年にわたり、観光バス、路線バス、トラック、鉄道、船舶など車両用のインバータ技術を利用した製品を開発している。

そのさきがけとなったのは、家庭用電気機器を車両用搭載するためのロータリーインバータだった。



1950年に開発されたロータリーインバータは、直流モーターに交流発電機を一体化した構造で、瞬時に大電流を必要とする負荷に耐え、車両振動等の悪条件にも使用できるものであった。その後、1000ワットのロータリーインバータを開発、バス用に蛍光灯、ボルトクーラ、TV電源として用途を拡げていく。

1950年に製氷機電源として高負荷用途で開発されたロータリーインバータ

1960年代になりトランジスタが商品化されると、日本初の1石式のブロッキング発振回路を用いたインバータを蛍光灯点灯電源として開発。「このインバータの大きな特徴は、点灯特性を最適化させるため、磁束漏洩形トランス(変圧器)を用いたことで、特許も取得しています」と後藤氏は語る。

トランジスタの出現は大きな転機ともなり、その後のインバータの開発に欠かせないものとなる。

後藤 雅秀 (1981年入社) 技術部部長

入社時は品質管理課に配属、1989年に技術開発課にて電子回路・マイコンソフト開発に従事。インバータの開発に取り組む。2006年から技術部部長となり、設計開発の責任者として、長年培って来た技術を駆使し、新商品開発に従事。



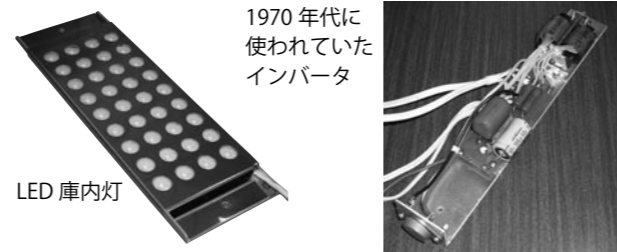
■インバータ各種



現在バスで使用されているインバータ



列車用インバータ(開発品)



LED庫内灯

1970年代に使われていたインバータ

その後2石式インバータやマルチ出力インバータ、ロングライフ補助内臓インバータなどお客様や時代のニーズにあわせた商品を開発。

特に2石式インバータは、小型、軽量で、蛍光灯のワット数に応じたトランス設計が必要なものの、電気特性が安定しており、現在でもお客様から高い評価をいただいている。

最近ではこれまで培って来たインバータの技術を利用して、近年脚光を浴びつつあるLEDや有機ELなどを使った製品の開発に力を注いでいる。

□ゴールドキング(株) (代表取締役社長 小澤 賢記)

バス、車両機装用電装品および、一般産業用のインバータ、整流器、非常用電源装置等の直流電源応用機器を開発製造。現在、新たにエレクトロニクス&アメニティをテーマに新しい技術の研究と開発に、積極・果敢にチャレンジしている。

本社

〒454-0912 愛知県中川区野田 1-380
TEL: 052-352-2421 FAX: 052-361-1402
<http://www.goldking.co.jp/>

私たち資材部会は、部会会員を専門分野ごとにグループ分けを行い、3分科会13グループからなる「ビジネスネットワーク」を設置しております。この「ビジネスネットワーク」は、会員のより強い連携と結束を実現し、架装メーカーに対するより積極的な協力体制が展開されています。

「VOICE」では、シリーズで部会会員会社の製品および技術が開発されるまでの経緯を紹介していきます。

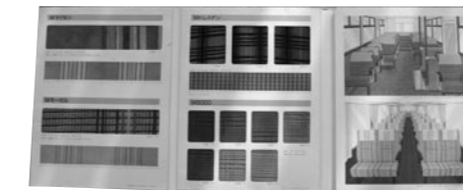
住江織物(株) 古い伝統を新しい力に変えて

住江織物(株)の歴史は古く、1883年の手織り緞通の製作に始まる。扱っている製品も、鉄道・バス・船舶内装以外に、一般住宅や参議院本会議室や迎賓館などの内装、劇場で使われる緞帳なども手がけている。

国産第1号となった鉄道シートは1901年、当時の高島屋から依頼され、製作した無地モケットであった。その3年後には、柄モケットを完成させ鉄道院に納入している。

当時はほとんどがウールを主流とした天然素材であったが、1970年代半ばになると、化学繊維が登場し、染色の安定性がよく、強度もあるポリエステル素材が多く使われるようになった。

バスシートの柄は、ヨーロッパのモチーフを参考に独自に開発。「ヨーロッパの重厚な柄が日本で受け入れられるのか、と当時の営業から言われましたが、実際には爆発的人気となりました」とデザイン部の島津氏は語る。それ以来ヨーロッパトレンドはシートデザインには欠かせないアイテムと同氏。



見本帳にも時代の変遷をうかがえる。写真は昭和中期頃の見本帳

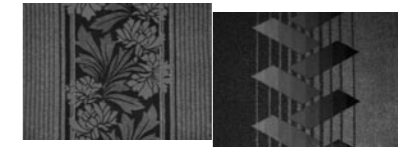
島津 邦康 (1992年入社・左)

R&Dセンターデザイン部第2デザイングループ主査
入社後、インテリアデザイン部でカーペットを主にデザイン・開発を担当。その後、産業資材デザイン部車両チームに異動、鉄道・バスの内装材を担当。2007年よりR&Dセンター車両資材デザイン部に所属。



小原 孝一 (1992年入社・右)

R&Dセンター設計開発部第2設計グループ
京都事業所ドレープ開発室配属後、1998年、開発センター設計開発部に異動。大阪工場第2加工課を経た後2003年、現在の開発センター設計開発部に所属。



バブル期に流行したセンター柄。真ん中に柄があるため、捨てる部分も多かった



最近のトレンドはブルー地にレインボーカラーをあしらったものが人気

また最近では、専用のインクジェットプリンターを使用して柄をつけるという。インクジェットの場合、白生地を用意し、その生地にプリントするのだが、使用するインクは、浸透性などが求められるので、エプソンやコニカなどとの共同開発で自社製の染料を開発した。

1998年には、「トリプルフレッシュ®」を開発。消臭、化学物質の低減を目的にした商品だ。「生地の裏に消臭剤をコーティングして、織り上げ、シートなどに使います。例えば、観光バスについたタバコ臭などは翌朝には消えています」と設計開発部の小原氏。シートのみならず冷蔵庫などにも使用が可能で、現在開発を進めている。

古いものから新しいものへ、脈々と受け継がれてきた技術は、また次に来る時代に沿った商品を生み出す力になっている。

□住江織物(株) (取締役社長 吉川 一三)

創業以来100年以上の伝統の中で、常に技術の向上を目指し、徹底した品質管理のもとに優れた製品を提供。今後も、インテリアファブリックスの総合メーカーとして、新しい市場動向を先取りした、21世紀にふさわしい製品を提供していく。

本社・工場

〒542-8504 大阪府大阪市中央区南船場 3-11-20
TEL: 06-6251-6801
<http://www.suminoe.jp/>